こしじ往来

米坂線代行バスと「ほぼ」一筆書きの旅

小児科桑島医院
桑　島　宏　彰

令和６年11月23日は勤労感謝の日のため診察はお休みなので、何をして過ごそうかと考えていたところ「奥羽本線大沢駅が令和６年12月１日から全列車通過」というニュースが目に飛び込んできた。その少し前に、ある先生が兵庫県の余部鉄橋など「聖地巡礼」された話を聞き、自分も乗り鉄（鉄道旅行）したいと思っていたため、「大沢駅」をキーワードに時刻表を開いた。

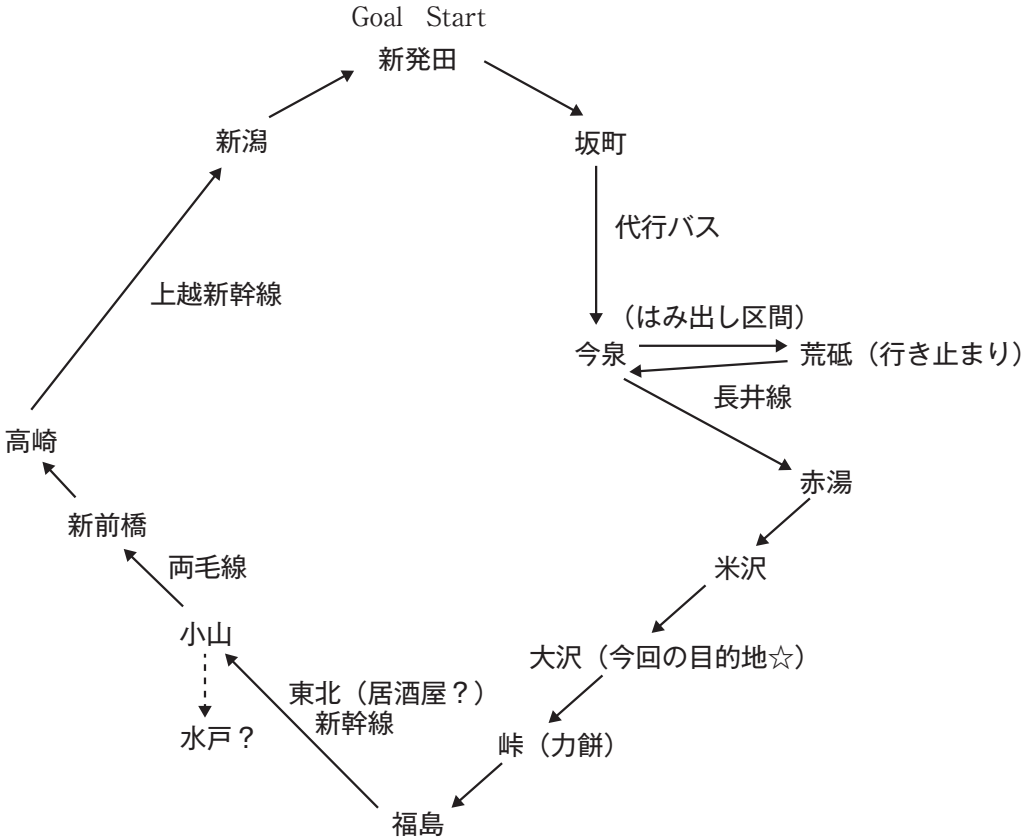
大沢駅は福島県福島市と山形県米沢市の間にあり、難所である板谷峠を越えるための４駅連続でスイッチバックが存在した駅の１つである。以前からこの区間を乗車したかったが叶わず、その後山形新幹線開業に伴いスイッチバックは廃止されていた。山奥で乗降客もほとんどないため、少し前から「冬期間は全列車通過」と季節営業みたいになっていたのだが、今後は通年で全列車通過となるという。廃止とどう違うのかはわからないが、今月いっぱいまでならば一度行ってみようと奥羽本線のページを開き、まずは福島と米沢のどちらから入るかを検討した。この区間は普通列車が１日６往復しか運行されておらず、１本逃すと次の列車まで５時間近く待たなければならないこともあり、乗車可能な列車は福島発が２本、米沢発は１本に絞られた。この区間だけ乗車するのであれば一番手っ取り早いのが、上越新幹線で大宮駅まで行き、東北新幹線に乗り継いで福島駅からアプローチして米沢駅からの帰路は山形新幹線を利用して同じルートで戻ることであるが、それではつまらないと考えてしまう自分は、坂町駅から米坂線を利用して米沢駅へ行き、そこから大沢駅を目指すことに決めた。

以前、松本駅から糸魚川駅までの大糸線の旅の時は、家族と犬までも巻き込んだが、今回は身軽な一人旅となった。

当日は雨が降っていたため、妻に新発田駅まで車で送ってもらい、６時48分発の酒田行普通列車に乗車した。平日であれば村上方面への通勤通学客で車内は賑わうのであろうが、乗客は少なく坂町駅まで座って行くことができた。坂町駅で米坂線に乗り継ぐが、令和４年８月の大雨による被害のため山形県の今泉駅までは、バスによる代行輸送となっているので、改札を出てバス乗り場へ向かった。バスの運転手に新発田からの切符を見せ、大型バスに乗り込むと、他には乗客の姿はなく、７時23分に坂町駅を発車した。国道７号線へ出ると県立坂町病院の前を通り国道113号線へ入る。鉄道のルートに比べると遠回りであり、信号待ちもあるが、道は混んでおらず、バスのシートも快適なためストレスを感じない。最初の停車「駅」は越後大島駅であるが、国道113号線から離れたところにあるため、駅前まで入らず、国道上の停留所に止まった。このように、今泉駅までのうち、８駅は本来の駅ではないところに停留所を設けている。次の越後下関駅へは、途中から県道へ入り駅最寄りの交差点で停車して、再び国道113号線に戻った。次の越後片貝駅は国道113号線に面しているため駅前に停車、次の越後金丸駅までは線路とほぼ並走するが、途中でまだ片側交互通行となっている区間もあった。荒川の対岸には、山肌がブルーシートで覆われたままのところもあり、本来の線路の部分が草に覆われていたりと、災害発生から２年以上経ってもまだまだ復旧に時間がかかるのだろうと感じた。山形県に入り、小国駅で初めて２名乗車した。その後は再び乗降客はなく、宇津峠をトンネルで越えて米沢盆地へ入った。萩生駅で２名乗車した後、９時７分、定刻通り終

点の今泉駅に到着し、バスを降りた。今泉駅は、JR米坂線と山形フラワー鉄道長井線（長井線）の接点になっており、お互いの路線は数学の先生が書く「x」のように接している。先を急ぐのであれば、接続する９時25分の米坂線の列車に乗り継ぐと米沢駅に９時56分に着くことができる。しかし、今回のお目当てである大沢駅に停車する列車は米沢駅13時８分発のため、３時間以上待つことになる。米沢市内を観光するというのも一つの手だが、そこはそれ乗り鉄の旅なので、今泉駅からは未乗区間である長井線に乗り、終点の荒砥（あらと）駅を目指すことにした。９時18分発の荒砥行ディーゼルカーは１両編成で、マンガ「ラーメン大好き小泉さん」の主人公が車体に描かれていた。車内には、南陽市内のラーメン店の一覧とそれぞれの看板メニューが掲示されていた。途中ですれ違う列車もなく、途中の９駅にすべて停車し、終点の荒砥駅には９時48分に到着した。荒砥駅は、他の路線とつながっていない「盲腸線」の終点のため、このまま折り返すことになる。駅舎内外を見て回り、10時32分発の赤湯行に乗車した。今泉駅まで同じルートを戻るが、南陽市へ向かうためか車内には立客も目立ち始めた。今泉駅で荒砥行とすれ違い、赤湯までの未乗区間も完乗し、11時29分に赤湯駅に到着した。赤湯駅からは、奥羽本線の普通列車に乗り継ぎ、12時３分に米沢駅に到着、お目当ての列車まで１時間ほどあるため、途中下車をした。米沢市と言えば「米沢牛」が有名であるが、駅前の目ぼしいお店を覗いてみたところ、気軽にいただけるお値段ではなかったため、山形県は蕎麦どころでもあるよね、と自分に言い聞かせ駅舎内の立ち食い蕎麦を啜った。売店でカップ入りの地酒（東光と住吉）と米沢牛の時雨煮を購入し、ホームに戻ると福島行普通列車が入線していた。運良く進行方向右側の２人掛けの席を確保することができたので山形行きの新幹線などを眺めながら出発を待っていたが、定刻になっても発車しなかった。この列車に接続する山形駅からの普通列車が遅延しているため発車が遅れるとのアナウンスがあり、しばらくして向かいのホームに到着した列車からの乗り継ぎ客で座席はほぼ埋まり、立客も出た状態で米沢駅を出発した。最初の停車駅、関根駅を過ぎるといよいよ山へと分け入って行く。車内放送では、12月以降は大沢駅をすべての列車が通過することを伝えていた。13時23分、定刻より３分遅れで今回の目的地である大沢駅に到着した。この駅は山奥の豪雪地帯に設置されているため、駅全体がスノーシェードに覆われており、採光のための窓もあるが暗く、ホームは照明で照らされている。向かいのホームで撮影している「撮り鉄」も確認できた。下車して、駅周辺を散策することもないので、車内から駅名票を確認して、Mission completeとなった。そのまま列車に乗り続け、次の停車駅は峠駅である。この駅も大沢駅と同様にスノーシェードに覆われている。峠駅では時間限定で名物の「峠の力餅」をホームで立ち売りしているので、お土産として一箱購入した。次の板谷駅までが山形県で、こちらもスノーシェードに覆われていた。県境を越えて福島県最初の駅である庭坂駅までは15分かかるが、かつて途中に存在した福島県側唯一のスイッチバック式の駅であった赤岩駅の遺構を確認しようとしたが見つけることはできなかった。庭坂駅に近づくにつれ周囲には住宅が増えてくる。最後の停車駅の笹木野駅を過ぎると新幹線へと接続する高架に続く線路と分かれ大きく右にカーブしながら終点の福島駅には13時58分に到着した。新幹線であれば途中駅をすべて通過して34分で到達できるところをのんびりと辿ることができた。本来であれば、福島駅側から時間をかけて米沢駅までスイッチバックを繰り返して乗ってみたかったものであるが、それが叶わず悔しく思った。福島駅からは東北新幹線で大宮駅まで向かい、そこで上越新幹線に乗り継げば新発田駅には18時20分に帰り着くことができるが、それでは面白くない。今回はまだ時間に余裕があるため、東北新幹線で栃木県の小山駅まで行き、こちらも未乗区間である両毛線へと乗り継いで群馬県の高崎駅へ出るルートを選択した。新幹線の車内で愉しむ食料などを構内の売店で物色した。ＴＶドラマ「居酒屋新幹線」を気取るなら、駅の外へ出て、ラジウム卵やラーメンスープで作るかつ丼、郷土料理のいかにんじん、お酒は「金水晶」をゲットしてくれば良いのだろうが、生憎とそこまでは時間がないため、弁当は「米沢牛すきやきと鮭はらこめし」、お酒は会津の「栄川」を購入して新幹線ホームへと向

かった。ホームでは、２年後には線路の付け替えのため見られなくなる14番線でのやまびことつばさの連結作業を眺めた。14時23分発のやまびこ214号に乗り込み、車窓風景を楽しみながら弁当を平らげ、お酒を飲み干した。小山までは各駅に停車し、そのうち那須塩原・宇都宮の両駅では後続のはやぶさに道を譲るため４～５分ずつ停車し、小山駅には15時32分に到着した。小山駅で下車するのは初めてで、両毛線の他には水戸線も乗り入れており、「このまま水戸線に乗ったらどこまで行けるのだろう・・・」と妄想も過ったが、ここは素直に小山駅16時２分発の両毛線経由高崎行普通列車へと乗り継いだ。車内はそこそこ混雑しており、停車駅ごとに乗降客があり、落ち着いて車窓風景を楽しむことができず旅情を感じることがないまま日も暮れて、17時56分に高崎駅に到着した。ここまで来ると後は帰るだけなので、高崎駅発18時29分のとき335号に乗り、新潟駅でいなほ11号へ乗り継いで新発田駅には20時18分に着くことを妻へメールで連絡した。新発田駅まで迎えに来てもらえることを期待しての連絡だったのだが、妻からの返信には、こちらの到着時間に合わせて、新発田駅前の居酒屋を予約してくれたとあった。東京育ちの妻が「はんばきぬぎ」の意味を理解したうえで予約してくれたのかどうかは分からないが、定刻通りに新発田駅へ到着し、徒歩でお店に行くと、妻と子どもが笑顔で迎えてくれた。早朝から自由気ままな一人旅を楽しませてもらい、最後は家族で美味しい食事を頂くことができ、最高の締めくくりとなった。

妻には感謝しかない。

（新発田北蒲原医師会報　令和７年10月号より）